

世界を「まほろば」に

薬師寺管主 安田暎胤

昭和四十年代の初頭、今は亡き高田好胤元薬師寺管長は、高度経済成長の先を憂い「物で栄えて心で亡ばぬように」と全国各地で講演をしたり、テレビに出演したり、著書を出版したりして心の大事さを訴えていました。著書の「心」とか「道」はミリオンセラーとなり、多くの人々の共鳴を呼び感銘を与えました。しかし最近の世相をみると、好胤管長の予測が的中したように思います。

昭和四十五年に大阪で万国博覧会があり、人々は物質文明に一層強い関心を持つようになりました。その翌年頃か、大阪の毎日会館で好胤管長が講演をした際に、松下電器の松下幸之助氏が楽屋に来られ、好胤管長に次のような依頼をされました。

「高田さん戦後の日本経済は順調過ぎるほど順調に成長したが、このままの調子が続けば日本が可笑しなる。今の内に日本人の心をしっかり持つようにして欲しい、あんたさんが中心になって何か精神的な運動をしてくれませんか。それにかかる経費はわれわれ財界で負担します」と。

まだ高田管長は四十代後半で僧侶の世界では若僧の内ですが、方や八十才に近い経済界の大御所です。突然の要望に戸惑いながら、「松下さんは PHP など立派な仕事をされてはるじゃないですか」と答えると、「あれはもう一人立ちしてるから、あれでええんです。それとは違う形で運動を起こして欲しい」とさらに願われました。重大な仕事を懇望されて断りも出来ず、さりとて即座に引き受けるとも答えられず、その場では恐縮しながら「解りました。よく検討させていただきます」と返事をして分されました。

高田管長は大役を依頼されたことを光栄に思いながらも、一人では力不足です。そこで日本の将来に憂いを抱いている同士を募り相談会を持ちました。メンバーは、万葉学者の犬養孝、裏千家の千宗室（玄室）、音楽家の黛敏郎、評論家の村松剛、ワコールの塚本幸一、サントリーの佐治敬三など二十数名でした。そして生まれた会が「日本まほろばの会」でした。「まほろば」とは、古代からの言葉で、美しい所、秀でた所、中心地などの意味です。

「やまとは国のまほろば たたなずく青垣 山こもれる 大和し うるわし」などと『古事記』や『日本書紀』の中にも用いられています。ただ現代人には耳慣れない言葉であり、周知されるまでには活動の努力と時間が必要でした。

会が発足されてから好胤管長は、他の講師と共に「日本の心」というテーマで、北海道

から沖縄まで全国各地に講演行脚されました。しかし同士が次々と逝去され、平成十年に中心的存在であった好胤管長の遷化を機に会は消滅しました。

せっかく出来た会の閉会は残念に思い、平成十五年に私が管主に晋山した際、伽藍復興と共に「まほろば運動」を継承する挨拶をしました。すると読売新聞社から、創業百三十周年の記念事業として参加したいという申入れがあり共同主催となりました。微々たる活動ですが、新聞を通じて大きく報道される度に、恥かしさと有り難さと責任を感じています。

宇宙衛星飛行士の毛利衛さんの色紙が、ある講演会場の応接間に掛けられてあり、そこには「地球まほろば」と書かれていました。おそらく宇宙から眺める地球は、どの星よりも美しく輝いて見えたのでしょう。確かに地球には生物が生存するために必要な空気や水、適当な太陽の熱、植物を育てる大地があり、地球は「まほろば」です。しかし残念ながら現実の地球には、国境があり、人間同士の紛争が絶えず、空気や水は汚染されています。もし全地球に保有されている核爆弾を使用すれば、地球は氷河の固まりに化すそうです。すると地球上の全ての生命体は死滅します。まるで人間は地球上の悪玉の癌細胞のようです。地球は四十億年の昔に誕生したそうですが、生命体が少しでも長く生きられるよう「まほろば」として持続させなければなりません。

安倍総理が美しい国づくりを提唱されました。私のいう「まほろば」と同じようですが、そのため教育基本法を見直し、人づくりから始めようとされたのだと思います。美しい国をつくるためには美しい心が必要です。私も日本の国を「まほろば」にするためには、人の心づくりが肝心だと思っています。樹木に譬えるならば、目に見える幹や枝葉が政治の役割であり、外から見えない根の部分が心の世界を担う宗教や教育の役割であろうと思っています。

三十数年前、師匠の随行で三木武夫元総理に会ったとき、「われわれ政治家は、法律で網を作り、国民の安全と幸福を守ろうとするが、どうしても網の目を潜ろうとする人間がいる。宗教家はその網の目を潜らない人間を育てて欲しい」といわれました。その言葉は印象深く私の脳裏に残っています。

宗教的情操の涵養が大事だと、教育基本法にも必要性が記述されています。しかし現実には教える先生が、どれだけおられるのか、先生の教育が必要です。人格形成するために徳育の必要性を認めながらも、具体的に教えるとなると難しいのが実情です。

私は日常用語で解るように「まほろば運動」として、五つの心を提唱しています。そ

の五つとは感謝の心・慈愛の心・尊敬の心・懺悔の心・容赦の心です。この五つの心を持つことによって、少しは心が豊かになり、「まほろば」になるのかと思っています。

最初に感謝の心ですが、何に感謝をするのかといえば、まず自分の命、すなわち生きている今の自分に感謝するのです。生命科学者の村上和雄さんによれば、数ある生命体のうち人間に生まれる確率は極めて稀で、一億円の宝くじを百万回連続で当るより難しいといわれます。次に自分だけの力で生きているのではない。大いなるもの、自然の恵み、両親をはじめ祖先や、世間の人々、他の生命の犠牲など、諸の縁によって生かされていることを感謝するのです。また「嬉しいことも悲しいことも、自分を育ててくれて有り難う」と人生の経験を肥やしとして受け止めるのです。感謝を発見するところに幸せがあり、感謝をすれば慈愛の心も生じます。

二の慈愛の心ですが、全ての生物には自己保存本能があります。その欲望が他と衝突する不和の原因になります。しかし人間は自分に不利になっても、自分を犠牲にしても他に尽くす行動を取ります。人間は自分が生きるために他人を殺す人もいれば、他人のために自分の命を犠牲にする人もいるのです。慈愛の心があれば殺人や窃盗の事件は起きません。そのためには何時も他の幸せを念じるのです。他の幸せを念ずるうちに尊敬の心も芽吹いてきます。

三の尊敬の心ですが、一般的に我々は神仏や大自然を畏敬し、両親や先生や先輩には尊敬し易いのですが、子孫や同僚や後輩には敬い難いものです。しかし人間は尊い命や美しい心を内に秘めています。その尊い部分と付き合い相手を立てるのです。人間関係は鏡に映る自分のごとく、こちらが尊敬すれば相手もこちらを尊敬するのです。私たちは自分の見方が正しいとして他人の欠点を批判しますが、すると相手もこちらを批判するのです。釈尊は「他人の邪を見るなかれ、彼が何をなし何を為さざるかを言うなかれ。我が何を為し何を為さざるかを思うべし」と諭されています。自分を見つめ、自分の至らなさを発見すると謙虚にもなり、懺悔の心も湧いてくるのです。

四の懺悔の心ですが、人間は理想通りには行動できない不完全なものです。自分の希望通りにならなければ怒って暴言を吐き、他人を不快にすることもあります。また自分勝手な行動をして不和を招くこともあります。自分の過ちに気付けば、勇気を出して少しでも早く詫びることが肝心です。詫びを受けて不快になる人はいません。不和の原因は双方にある場合が多いので、鏡の如くこちらが詫びれば相手も詫びてくれることになります。双方が詫びれば不和の関係は改善され、詫びれば次の赦しにも発展します。

五の容赦ですが、赦すことは辛いけれども、責めているのも苦しいのです。しかし赦すことにより怒りから解放され、自分の心のやすらぎが得られるのです。したがって赦すことは、幸せの処方箋であり、赦さないことは苦しみの処方箋ともいわれます。だからといって相手の非行や犯罪を良しと認めることでも、「相手が悪い」と思いながら、我慢することでもないのです。

『般若心経』に説かれている空とは、かたよらない、こだわらない、とらわれない、大空のような、ひろいひろい心になることです。赦すことは、『般若心経』の「空の心」を体得することになると思うのです。

最近の世相の報道をみますと、毎日のように殺人や窃盗事件の無い日はありません。しかし日本人の殺人、窃盗、強姦、交通事故死者などの凶悪犯罪発生件数は、先進諸国十五カ国の人口比率の上では一番低いのです。だからといって安心することなく、犯罪はゼロに近づけなければなりません。まだまだ数を減らせると思います。また日本は、中国や韓国からはまだ十分な信頼を得ていませんが、中近東や東南アジアの諸国からは、平和友好国家として高い評価を得ています。今日ある日本の物の豊かさほど、心の豊かさをレベルアップし、「まほろば」を一人ひとりが築き、そして家庭から地域に、さらに日本から世界の国々に広がることを願っています。